

講演3 「肢体不自由のある学生の受け入れについて」

鎌田 一雄（宇都宮大学 工学部・教授）

<講演概要> 肢体不自由のある学生2名を学部卒業研究（OM君）と、大学院博士前期課程（NM君）で指導した経験から、肢体不自由のある学生の大学での受け入れの課題などについて述べる。受け入れた学生2名は、ともに進行性筋ジストロフィーの傷病を持っており、車いすを利用していた。また、自立的移動は不可能であらゆる場面で支援者を必要としていた。2人には身体機能上の違いがあったが、研究室ではさほど大きな差異はなかったと考えている。また、研究室で過ごした他の学生も、対応を特別なものとは考えていなかったと思っている。

ここでは、当事者間の個人的な関係、周囲の小さな組織との関係、および大学という大きな組織との関係に分類して課題を整理し、説明する。これらの課題には、単純な物理的な環境課題だけではなく、一緒に生活するという行為に対する人的な関係におけるバリアなども含まれる。

はじめに

宇都宮大学の鎌田でございます。肢体不自由のある学生の受け入れについて、お話をさせていただきます。話の組立てですが、まず事例の概要です。私は筋ジストロフィーの学生2名を受け入れましたが、学部から入ってきた時点から全てフォローしている訳ではありません。1名は卒業研究、これはインフォーマルと言いますか、公式な所属は私のところではないのですが、実質的に卒業研究として受け入れました。それから通常の大学院生として受け入れました。このように2名を受け入れた訳です。その中での受け入れの課題等について、教員の問題、研究室全体の問題について、それから先ほども出ましたが、組織として - 例えば学科、学部とか大学全体というところ、私が感じた課題について説明をさせていただきます。それから障害への対応としては、特定のその個人と組織というものの関係みたいなもの。それから関連することについて話させていただきます。まとめはここに少し書きましたけれども、個人の経験と組織の位置と書いてあるんですが、まさに先ほどの鈴木先生のご意見と同じですね、蓄積が全然ないというか、そういうメカニズムが、組織としてほとんど作られていないというのが私の率直な感想です。

事例の概要

OM君の事例 2名の受け入れなのですが、最初、卒業研究、卒業論文の指導をしました筋ジストロフィーの学生なのですが、私の研究室に入ったときには、すでに人工呼吸器をつけていました（図1）。車椅子で、自分ではもう動けませんので、全介助でした。通学は全部家族が支援して、車で移動して研究室まで来て、という形です。3年の頃から私の講義を聞いておりました、学科の他の教員の講義も聞いてたんですが、講義中も全部介助ということで、実はお母さんと支援の人達がときどき入ってきて、介助されていました。人工呼吸器をつけていたんですけども、発話は可能で、呼吸器のタイミングがありますが、かなりクリアな発声ができました。これは、筑波技術大学の岡本先生にお願いをして、音声認識ができるかどうか実験をやりました。そしたらかなりきれいにできるくらいの発話がありました。ただし、コンピュータの使用については、親指操作のワンスイッチだけで、入力装置は特別なものを使っておりました。

研究室での付き合いは、卒業論文で1年間だったのですが、その前、実は3年ぐらい付き合いがありました。それから卒業の後も付き合いが続きまして。かなり長い間、色々やりとりをしました。

NM君の事例 それからもう1人の学生なんですけれども、修士論文の指導で受け入れました。やはり同じように筋ジストロフィーで車椅子を使用していました（図2）。これは電動ではなくて普通の車椅子でしたが、自分で動かすことができませんので、全介助になっておりました。やはり講義中、家族

の方が付き添い、通学も介助という形でした。発話は可能でした。通常のキーボードを使うことができました。しかし、身体との位置関係が非常に微妙で、これはシーティングも含めて色々と学生と検討しました。実はこの学生は、1年遅れて卒業した後大学院への進学を希望していたのですが、急に9月末卒業になりまして、半年間、研究生として研究室で研究におりました。それから大学院の2年間、一緒でした。その前にも少し付き合いがありまして、合計で3年から4年ぐらいでした。全て家族が介助という形でした。

受け入れた学生2名は、同じような筋ジストロフィーなのですが、かなり障害の程度に違いがありました。また、障害の程度だけではなく、家族への支援とか本人への支援の環境も異なっておりました。そこは細かい話になりますので、省略させていただきます。外部からの支援はかなり良好なものになっていたかなと思っております。

OM 君（卒業論文指導）

- 進行性筋ジストロフィー
- 人工呼吸器・車いす
- 生活は全介助 通学（車移動）は家族が支援
- 講義中も介助
- 発話可能、1スイッチ（親指）入力装置使用
- 卒業論文1年間+その前3年間の付き合い
- 卒業後も付き合いが続いた

図 1

NM 君（修士論文指導）

- 筋ジストロフィー 車いす 生活は全介助
- 講義中も付き添い
- 発話可能、キーボード使用
- 研究生で半年+修士論文2年間+その前1年間
- 通学は家族が支援

図 2

OM 君の受け入れ 卒業論文の指導は、先ほども申しましたように、教育学部の学生だったので公式な形ではありませんでした（図3）。工学部情報工学科の私の研究室で卒業研究をしたいということでした。私は事前に話は聞いておりましたので、私自身は何も問題ないと考えておりました。あまり細かいことまでは申し上げられませんが、かなり大変でした。研究室に入ってきて卒業研究を実施するときの研究指導は私がするのですが、教育学部の担当の指導教員が卒業研究の単位認定を行いました。しかし、実質、私の学科で卒論発表をしました。ただ、4年生になる前、3年のときから少し情報工学科の講義を聴いておりましたので、他の教員とも顔見知りで、話もしておりました。実はその辺が、学科で受け入れるときには助けになりました。ここには書きませんでしたけれども、学科の中ではどういうふうな形態で受け入れるかで、色々意見がありました。

受け入れができるようになりましたが、1つだけ事務から意見がありました。工学部の事務から、事務にまず最初に相談してほしいと言われました。この受け入れ後からは、工学部での事務担当者が決まっておりましたので、その人に全部話をしました。そしたら事務で全て判断してくれて、あらゆる事務処理を支援してくれました。そういう意味では組織としてうまくしなければいけないということを、これで私は学習をしました。

OM 君受け入れ時の課題

- 他学部学生の卒論指導（規則なし）に関わる事務的・組織的な対応と関連する処理
- 学科の講義を以前から聴講していた（既に支援者がいた）
- 学生と介助者のための部屋
- 受け入れの合意を得るのは大変だった

図 3

NM 君受け入れ時の課題

- 突然の卒業で研究生として受け入れ
- 教育学部から工学研究科（情報工学専攻）へ
- 基本的には、一般学生と同じ対応と、特別な対応への配慮
- エレベータの定期保守：移動不可能な時間帯
- 建物内の一般学生からの支援
- 大学スタッフからの支援

図 4

NM 君の受け入れ 次の大学院を受け入れた学生は、正式な私の研究室の学生、修士課程の学生でしたので、何も問題はありませんでした（図4）。入試のときは、ゆっくりですけれど筆記ができましたので、時間延長で試験を受けました。最初の卒業論文の学生とは少し時間的に差がありまして、少し重なっているところもありますが、こちらの大学院生のほうが後になっております。この学生と最初の学生はエレベータで移動しますが、この学生ときは平日にエレベータの点検がありまして、それが講義が終わって、部屋の移動とか研究室に戻るときに重なりますと動けなくなってしまいました。それから、身障者用のトイレが1階にありますが、講義室が2階にありまして、エレベータが止まると動けないことになりました。これは色々話をした結果、1つは周りにいる学生が、車椅子ごと全部運んでくれました。それから事務とも話をしましたが、事務の方からは少し厳しい意見があって、保守契約の中での時間帯とかも絡んで難しいので、次の年度の契約時ときにはなんとかしようという話になりました。支援体制は、組織全体の、公のものは、あまり完璧なものではないのですが、周りの学生等には声を掛ければ、全部やってくれるという雰囲気がありました。学科の建物そのものが1つ独立したのになっておりましたので、そういう面も、色々な形で支援をしてもらいやすかったかなと思っています。

障害への対応

研究室内 実際に障害者との対応ということですが、研究室の中は、実は私は何も積極的には動きませんでした。こういう学生が来るからよろしくお願ひしますと学生に言っただけで、あとはそのときの大学院の学生とか、卒研の学生等が全部やってくれました。研究室内では大きなバリアみたいなものはなかったようです。学生は協力的だったと書きましたけれども、実は学生側から見るとこれで十分と書いていたみたいですね。ところが本人と支援している家族の方々からは、ときどき話もありましたし、後々からまた色々と話がありました。大学の中の状況については、普通の学生はよく分かってないところがあったということが分かりました。それから支援者自身も、学生と同じようにはやはり分からない。そうすると、学生がしゃべってる内容で分からないところが時々あります。これは事務手続きとかその他色々なものです。研究そのものではありません。しかし、それをどのくらいまで聞いていいのか。もう少し質問したいときにどのくらい質問をしていいのか。その辺のところがよく分からないので、なんとなく質問しないままにいたという話を聞きました。しかし、全般的に研究室の中、あるいは学科全体の学生との間というのはかなりスムーズに行きました。

学科内 それから学科の他の教職員との関係も、最初に受け入れるとき、1人目の場合は色々あったと申しあげましたけれども、2人目の学生についてはそういう話は全く出ませんで、スムーズな対応であったと思います。これは、障害を持っている学生、あるいは支援者がちょっと声を掛けると、大体なんでもやってくれる環境になっていたようです。私はその当時、全部を把握していた訳ではないのですが、色々話を聞きますと、そのような形になっていたようです。

障害への対応

- ◆研究室内（学生との関係）
 - スムーズな対応 特別なバリアなし
 - 学生は協力的であったが、障害学生・介助者からは、状況がわからないこともあった
 - 介助者が聞ける質問には限界がある
- ◆学科内（他の教職員・学生との関係）
 - 受け入れ後は、スムーズな対応
 - 特別なバリアなし 声をかければ支援・協力

図5

障害への対応

- ◆学部内（教職員・学生との関係）
 - 特定の個人はスムーズな対応
 - 結構協力的であったが、組織としての対応にはつながらなかった
- ◆大学（教職員・学生との関係）
 - 特定の個人はスムーズな対応
 - 組織としての対応が整備されない
 - 「何処へ行けば、問題が相談できるか」に対する特別な支援・情報が貧弱

図6

組織としての対応 こうお話をしますと、かなりスムーズに行ったんじゃないかと感じられるかもしれませんが、それはある意味で言ったら表面的なところです。やはり、個人的に非常に意識が高い事務スタッフ等は、個別に色々話をして、何か必要なことがあればやるからと、声を積極的に掛けてくれたり、色々としてくれたのですが、組織全体としてどういうふうにするかということについては、全くありませんでした。

組織としての対応に繋がらなかったということも含めてかと思うんですけども、卒論で対応した1人の学生は、もう小学校の頃から障害があって、大学へ入ったときにマスコミでかなり取り上げられました。誰もが知っている学生で、その言動といますか、色々課題があるというのをマスコミが取り上げました。大学側は少し過敏反応に近いような形になっていた部分もありました。ただし、これは、実は組織に対するプレッシャーとしては、非常に良かったかと思います。しかし、もう少し組織全体としての対応が必要だったかなと思っております。組織の対応として整備されていない頃がありました。

もう1つは、先ほど申し上げましたように、どうしても一般の学生ほど情報が入ってこないのが、全体のイメージ - 何がどう動いているか、どこへ相談すればいいのかというのが分からないということがありました。どこへ行けばどういう問題が相談できるのかという支援が非常に弱いものとなっていました。卒業研究、修士の研究等で2人と一緒にやりましたが、何か問題があったときは、学部の中で事務の方へ相談しました。しかし、それは組織全体として、うまく体制を作るといような形にはならなくて、対症療法的な形で、その問題が解決したらそこで全部終わってしまうといような形になっていたと思っております。

受け入れの波及効果

受け入れの波及としては、実は私の研究室へ受け入れた卒業研究の学生を被験者として、新しいテーマを別の研究室でやり始めたものもありました。研究テーマの領域拡大ということで、他研究室の役に立ったと思っております。また、それがマスコミに取り上げられて、その研究室は大きく新聞に取り上げられたということもありました。それから、先ほど申し上げましたように、障害を持っている学生が、大学で卒業研究や修士課程の研究をしていることで、マスコミの注目がかなりありました。地元紙ですけれども、かなり報道してくれました。そこには大学が見られているという意識はあるのですが、だからなんとかしようという大きな流れには、残念ながらもありませんでした。

就職について

就職ですが、これはもう組織としては対応できませんでした。今は就職支援室という組織ができておりますけど、当時はやはり学科、あるいは学科の中でも担当教員がという形が多くて、ましてや10年くらい前になりますけれども、障害を持っている人の求人はほとんどない状態でした。それでも、車椅子で普通に生活ができて人がいたらぜひ紹介してくださいという求人が企業から何件か来ました。しかし、こういう全介助の形の学生に対して、仕事ができるようだったらぜひ採用したいとは、残念ながらもありませんでした。大学院を修了した学生は、大学関係のところ採用して頂けるかどうか、個人的に色々話をしましたけれども、やはり難しいということになりました。

学部卒業の学生に関しては、本人が色々ところで売り込みをしまして、実際にはネット上の記事を何回か書いていたり、連載をやっていたりしていました。また、地元の企業で契約社員として、障害者から見た色々なシステムのインタフェース等の意見を出すということで、短期間でしたけれども仕事をしました。これは支援者の家族から聞いた話なんですけど、ハローワークですか？ ハローワークに登録をしたいと言ったら、ハローワークは「それでは来てください。来て書類に書かないと何も動きません」という、非常に冷たい態度だったということで怒っていました。そういうこともありました。

組織的な対応へ

組織的な支援については、本当に大学としてはまだまだ貧弱で、全く進展がないのではないかというふうにも感じることがあります。明確な進展が多くない状況かと思えます。最後に、先ほどの鈴木先生のご講演と同じで、一人ひとりの関与したところでは、いろんな知見と言いますか、知識とか経験があります。しかし、それらが組織全体として共有できるような仕組みが全く考えられていないというところで、努力した人の知見などが活かされていない。努力の甲斐があったというふうに感じさせるものが何もできていないと思います。私の場合は、組織はなんとか動いてもらえたところもありました。しかし、私の言ったことを理解して、組織の中の特定の個人が、組織としてではなく、組織の中で、なんとか自分の役割の中でそれに対応するという形で動いてくれたことであって、やはり組織として対応していたということにはなっていなかったと思います。

最後に、当事者には初めての事例でも、組織としては経験済みの事例であるという形に、ぜひ受け入れを持っていきたい、もっていくようにしなければならないと思っております（図7）。以上でございます。

組織としての知の蓄積

—個別事例を「共通知」に—

- ナンシー・M・ディクソン著、梅本、遠藤、末永訳：ナレッジ・マネジメント 5つの方法—課題解決のための「知」の共有—、生産性出版（2003）
- 個別的な事例における当事者の対応・努力が、より多くの人たちの活動に役立つようにするには・・・
- 当事者には初めての事例でも、組織には経験済みの事例とするために・・・

図7

